

フェロー称号の授与に寄せて

井上君夫

(元中央農業総合研究センター)

はじめに

平成 28 年 3 月に開催された日本農業気象学会全国大会に於いて、栄えある永年功労会員表彰（フェロー称号）を受賞することができました。授与式には出席できませんでしたが、大政謙次会長からの賞状と記念品（ルーペーパーウエイト）は宮田 明関東支部長より頂戴しました。この審査に係わられた委員各位および全学会員の皆様へ感謝申し上げます。顧みるに、本学会への入会は日本気象学会とほぼ同時期でした。当時の研究発表は日本農業気象学会、日本気象学会、乱流研究会、接地気象研究会等であったと記憶しています。この時代における乱流研究者との交流は、その後の筆者の研究に多大の影響を及ぼしただけでなく、1980～90 年代に頻発した水稲冷害の解明や対策といった応用研究への基礎になったと思っています。これら一連の研究が受賞の対象になったとすれば望外の喜びであります。

1. 「生物と気象」の創刊

さて、本稿が「生物と気象」に掲載されることについても感慨深いものがあります。それは本創刊号の編集に携わったからです。農業気象学会の目的は、農業気象学の進歩並びに農業気象学についての知識の向上および普及を図ることであると総則第 3 条に記されています。農学や気象学などに基礎を置く基礎研究と収量予測や冷害対策といった応用研究を並行して進めるのが本学会の特徴であると理解しています。しかしながら、2000 年頃から我が国においてもインパクトファクターで研究業績（自己評価）が評価され、それに基づいて経常研究費やプロジェクト研究費の配分が勘案されるという時代に至りました。また、多くの研究者が取り組んできた水稲冷害や自然災害も地球温暖化の影響からその様相を変化させるなど、環境元年と言われ始めたころから研究や学会等を取りまく環境に変化の兆しが現れました。このような背景を受け、当時の鈴木義則会長はじめ学会員の皆様は農業気象の活動・成果を積極的に世に問うてみる一方策として、学会誌「農業気象」の分冊化を決定しました。創刊号は 21 世紀の幕開けとなる 2001 年 3 月に刊行されました。従来の「農業気象」は学術論文誌、創刊する「生物と気象」は情報誌と原則位置づけ、後者は本学会および関連学会等の行事・活動情報をタイムリーに、研究・技術・普及等の実用記事は分かりやすく迅速に発信することによって、読者層の拡大と会員獲得を進める意図が込められました。

創刊号の巻頭言は鈴木義則学会長に執筆を頂きました。

<http://agrmet.jp/wordpress/wp-content/uploads/2017-H-1.pdf>

2017 年 1 月 10 日 掲載

Copyright 2017, The Society of Agricultural Meteorology of Japan

詳細は割愛しますが、会長は我が農業気象の分野で大活躍の方々、農業気象学関係の講座や研究室の後継者になりにくい状況、さらには講座や研究室そのものの不要論にすら立ち至ってしまう危険性を孕んでいる、また学会誌「農業気象」の内容を精査してオリジナル論文とそれ以外の情報とに分けることで「農業気象」のインパクトファクターの獲得を実現したい、という実情を述べています。さらに“創刊に寄せて”というテーマで、内嶋善兵衛先生には「地球環境と農業・食料」について、丸山清明先生には「21 世紀の人類の食糧と生産技術」、古在豊樹先生には「省資源・環境保全的閉鎖型植物生産システム」について執筆をお願いしました。先生方には今後の農業気象の進むべき具体策について論じていただきました。あれから 15 年を経過した今、多くの会員各位には再度読み返していただければ有難く思います。

その後の「生物と気象」は学会行事のアナウンスやシンポジウム報告、学会賞等の受賞報告といった内容が大半を占めており、他分野の研究者に役立つと思われる農業気象独自の研究手法や計測技術といった実用記事が少ないようです。従来の「農業気象」の難しい記事を分かり易く多くの読者に伝えるという創刊誌「生物と気象」の役割に立ち返ると共に、新たな使命を携えて本誌が充実されることを願っています。

2. 日々雑感

現在の東北農業研究センターの時代に、原子力等の突発性事故に伴う放射性物質の環境移行・線量評価モデル調査に外部委員として参加した際に、大気や海洋、土壌、作物等を経由して人体に取り込まれる線量評価が如何に難しいか、さらに研究が欧米より立ち遅れているかを知らされたのは今から 20 年程前でした。この現実を痛感させられたのが 2011 年 3 月 11 日の東日本大震災でした。この時には筆者は既に離職しており、放射性物質等の拡散状況を知る手段はテレビ報道番組だけで忸怩たる思いをしましたが、実態が明らかにされ除染作業が始まったのは事故から数年後でした。最近、この時の研究者の対応について、日本学術会議は積極的に関与すべきとする声明を出していることを知りました。また昨年、日本学術会議は軍事研究のあり方を見直す「安全保障と学術に関する検討委員会」の設置を決めたこと知り、違う意味で筆者の過去の記憶が甦りました。1970 年代に読んだ海外の大気乱流や拡散モデルの研究論文の殆どの謝辞には、本研究に軍事費が使われたと書かれていました。

さて近年の科学の進歩は目覚ましく、社会や人類の行く末にまで影響を及ぼしかねない科学ニュースが飛び込んできます。昨年の熊本地震では最初の本震を超える余震が継続するという事態に気象庁は政府の地震調査研究本部の要

請を受けて発表方法を変更，将棋や囲碁の世界では人口知能が名人に勝つといった事態に人工知能学会綱領の見直し，医療分野では再生医療の大きな成果と同時に研究不正の問題が取り沙汰されるという事態に，文化，芸術，哲学，医療等々の学問領域を超えた本質的論議と科学者，研究者の本来の使命と慎重さが今まで以上に求められているように思います。数年後には世界最速のスパコンを超える次世代スパコンが誕生するといわれており，個人情報を含むビッグデータから人間の予測を超える結果が導出されるであろうと危惧されています。そこには個人や社会が確率によって判断され，行動規制されるという事態が起りかねないからです。イギリスの計算機科学者 E.F. コッド氏のアルゴリズム RDBMS と次世代スパコンが駆使できれば，その理論的可能性は否定できないかもしれません。

最後に，3人の先生方には「地球環境と温暖化」，「食糧生産と生産技術」，「省資源と植物生産システム」をテーマとして論述していただきましたが，これこそが人類の命題であり，異分野の研究者集団から成る農業気象学会は大いに貢献できるものと考えています。昨年の4月から農研機構の組織が改変され，温暖化に伴う地球環境変化や作物の適地栽培地帯の見直し，植物工場つくば実証拠点，情報技術の利活用等々の強化が打ち出されています。地震，台風，豪雨等々の自然災害をみても，その強度，頻度，パターンがそのまま繰り返されず，カオス的現象でもあり，フラクタル性をも持ち合わせているが故に，研究者は先入観を持たず，事象に予断なく挑まなければならないと思います。コピーは紙とインキで作れるが，オリジナルは生命の燃焼によってしか作れない（岡 潔 随筆集「春宵十話」より）。